2022年7月3日（日）相談座談会　ダイジェスト

（そろそろホンキで）事業継承・世代交代・後継者育成を話しましょう！

●趣旨

2021年、10周年をむかえた「ぽぽらフェスティバル」の企画で、市民活動、自治会などの地域活動団体の多くが課題としてとらえている「世代交代、後継者育成、活動継承」をテーマとした学習・交流会を開催しました。世代交代を成し遂げたフュージョン長池 創業者の富永一夫さんをゲストに、事例やコツを学び、参加者同士でも意見交換。その活動の継続です。

明確な答えはない課題ですが、話すことにより「なぜ世代交代は難しいのか」「活動継承の意義や方法」などアイディアを見出していきます。

●スタイル

・毎月1回程度テーマやゲストを設定した「相談座談会」を開催し、内容を深堀りします。

・基本的にゲストによる話が中心で、オンラインで視聴や参加、意見交換もできます。

・相談や課題の概要や出たヒントやアイディアはHPやSNSで共有していきます。

●ゲスト、進行

・7月～9月の3回は引き継ぎの両側にいる2人がゲストです。

春日部C工房　代表　西山光昭さん（70代）

“川のお兄さん”　小林知輝さん（20代、学生）

・進行　春日部市市民活動支援センター　アドバイザー　生越（おごせ）康治

○2021年の「ぽぽらフェスティバル」での富永一夫さんのお話より
・「事業」「ボランタリーな活動」は分けて考える。
・活動も団体も“ピンピンコロリ”がいい（ボランタリーな取り組み）
・後継者育成は長期スパンでとらえ、“第2の矢”も用意する。
・他の団体のNo2、3などに声をかけてもいい。活躍の場となる。
・代表に定年あり、活動に定年なし。
・「外から来た人」だからこそが言えることがあり、役割もある。
・本当になくせない活動は別の場所で団体やキーパーソンを育てる。
市民活動センターがしっかり地域の課題と団体の状況を観ていく。
→今後の市民活動センターの力の発揮どころ

●春日部C工房　代表　西山光昭さん

○活動のきっかけは東日本大震災

10年前の定年後から地域活動をはじめました。それまでは関心はありましたが、忙しくて参加できませんでした。きっかけは東日本大震災。塩釜で復興のためのまちづくりの「工房」が話題になっていて、災害があろうがなかろうが、街の中に市民がかかわれる「工房」があればいいなという想いが芽生えて、活動をはじめました。ちょうどそのころに、市民活動センターができ登録団体に。その頃、埼玉県が川に着目していて、私が住む身近な古利根川再生の取り組みがはじまっていました。コンクリート護岸の計画を止めたくて、何度も役所に行きました。最後は部長も親身になって聞いてくれました。その話し合いの中から、家の前の遊歩道計画が整備され、河川敷を親水性がある景観が保全されました。せっかくつくられたので、この景観を守ろうと思い、遊歩道の整備などの活動を10年間続けています。花壇づくりなど様々な取り組みをしていますが、「事業」や「団体」として取り組んでいるわけではなく、家族単位でできることから始めています。

○活動の“手ごたえ”10年続けたら、明らかにゴミを拾うひとが増えた！

どんな活動でも経費がかかってしまいます。持ち出しでやることがほとんどだと思いますが、誰でも活動ができるように、なるべくお金をかけずに活動をしてきました。しかし道具など必要なものもあります。そこで、遊歩道に募金箱を置いてみる取り組みをしてみました。多くの方に少しづつご協力をいただきたいため、特注でコインしか入らない設計にしてもらいました。始めてみると「紙幣も入れたい」というあたたかい言葉も。1ヶ月間×3回の募金で平均1万5千円ものご協力があり、とても感謝しています。また、最初にはじめたころより、明らかにゴミを拾う方が増えました。継続した活動の実績だと思っています。

○活動の今後について

昨年、富永さんの話を聞いて、今後、活動をどうしようかと考えました。

近所に住んでいる、よく遊歩道を使っている子どもがいるご家族が、今までも活動に参加してくれていました。継続していくためには役所への届け出が定期的に必要になるので、それを今後引き継いでやってくれませんか？とお話をしてみたんです。

やはり負担になってしまったのか、その話をしてからぱったりと遊歩道に来なくなってしまいました。その家族にやってほしいなと勝手に期待をしていたんです。このお声がけは“失敗”になってしまうかもしれません。

●川のお兄さん、小林知輝さん

○おじさんの一言がきっかけに！

遊歩道の整備やゴミ拾い、外来種の駆除、子どもたちに魚のとり方を教えるなど「川の取り組み」をしています。また、堆肥づくりなど農業文化の振興などの活動もしています。活動のはじまりは埼玉県の「川の再生プロジェクト」。身近な川が整備の対象にならなかったので、下流の“いい川”まで遊びに行っていたんです。そこでたまたま「川の団体」が活動していて、そのおじさんに、「ジュースあげるから一緒にゴミを拾わない？」と声をかけられたんです。それ以来、その方々に川の遊びや整備などについて教わりました。そのころ（小学生）は市民活動をしているという意識はありませんでした。その後、自分は10歳から20歳になりましたが、当時70歳だったおじさんたちは80歳になっていました。自分が教わったことを、自分も引き継いで、子どもたちに伝えることができたらいいなと思っています。

○「一言」が尊重されない

会議に参加することもあり、「WEBを使えば印刷費を安くなりますよ」「SNSを使えばもっと広くいろんな人に活動を伝えられるんじゃないですか」と提案をしたことがありました。しかし、その時に否定はされなかったんですが、真に受けてはもらえませんでした。活動の反省会で、危険な部分の指摘をしたこともありましたが、議事録にも残されないこともありました。自分としては純粋に活動のための意見だったのですが、それは自分が若すぎたのか、伝え方がまずかったのか。受け入れられていないな、と感じ、その活動から離れてしまったこともあります。

○同世代へも伝えたい

地域活動の「後継者育成や次世代の担い手」のための団体を同級生たちと立ち上げましたが、それはなぜかうまくいきませんでした。地域のボランティアにも参加している同級生たちでしたが、自分の想いが強すぎてしまったのか、上にも横にも理解されないような状況になってしまい、今後、その団体は閉じることに。

そのほか紆余曲折もあり「自分は必要とされていないんじゃないか」「市民活動ってなんなんだろう」とふさぎ込んでしまい、活動をやめようと思った時期があります。しかし、富永さんのお話を聞きに行ったり、その他の地域で環境保全活動ができるようになったりと、現在は前向きに活動しています。場所を変えてみたらうまくいきました。いつか、うまくいかなかった地域でも活発に活動できればいいなと思っています。

ちなみに最初の川の団体には今年度、役員に任命されました。少しづつ認められたんでしょうか。

●ゲスト、参加者の座談からの話題やヒント、アイディアなど

○やはり“多世代”がいるといい

（小林さん）基本的にシニア男性が中心の団体でしたが、40代の方も一人いて、仕事で忙しく有給をとって活動をしているような方でした。親しくさせていただいて、活動が続けられたのは、その方の存在も大きかったなと思います。

○市民活動やボランティアの“芽生え”

（小林さん）東日本大震災の1年後、気仙沼にいったこと。基礎しか残っていない家を見て「何も残らないのは悲しい。つながりとかそういうものを残していきたい」と思ったこと。

（西山さん）参加される人にとって、そのような芽生えが起こるような取り組みをしたい。

○川が汚れているから清掃をする、などの実務的な部分の「市民活動」と、その団体や活動が「自分の居場所（アイデンティティ）」になっているから続けている、という側面がある。

・（小林さん）「自分の居場所」になっていて、自分自身の人格形成にもなったと思っています。

・（西山さん）居場所は大切だとおもっています。若い人たちとつながる機会をつくるように、意図的にうごいています。

○「誰のため」に活動を引き継いでほしいと思っている？

（西山さん）身近な自然環境を守る活動なので、その周辺に住む方々が「この景観を次の世代に残したい」と、今後も思って続けてくれたらいいなと思ってはいます。「誰」というか、「命のにぎわい」づくりだと思っています。

（小林さん）まとを得た答えにはならないが、「この景観を残したい、次の世代にも」という気持ちでやっています。人を含めた「多様性」が大切で、それは環境も市民活動も継続のためには必要だと思っています。

○「活動の目的」と「組織運営」は別？

→「人がほしい」ではなく、「あなたがほしい」にどうしてならないのか、引き継ぎ手や後継者の気持ちを考えると？

（小林さん）「自分の感覚をそのまま引き継いでやってほしい」と、将来的には思ってしまうかもしれません。

○やりたい人がたまたまいたらいいが、自分と同じことをやらせようとするのは、後継者育成ではないのでは？活動したいという想いの引き継ぎや育成が必要ではないか。

（西山さん）自分の団体は続けなくてもいいとは思っていますが、行政から“借りて”景観保護をする申請が毎年必要なので、それを引き継いでほしいとい思いがありました。理想は手続きなく、地域の住民が当たり前のように活動できるようになること。

（小林さん）川関係の取り組みの話ですが、活動が続けられれば、組織は続かなくてもいいんじゃないかと思っている活動者は多いと思います。ですが、活動する人はそうそう出てこないので、そのために組織は続けた方がいいと思っています。

○「個人の活動や想い」はもちろん大切ですが、少し大きな取り組みをしたり、なにか契約をしたりと、市民活動には団体や組織としての存在が必要な場合もあります。その両方で話をすすめていきましょう。

（小林さん）最初はその人の話をよく聞いて、その上で自分の意見を言ったり実践するばいいのかなと。今思えば、最初は対等に見られないのはしょうがないと思いました。

○「若者だから」「経験が浅いから」というだけで、話を聞かない、その姿勢がないような団体や組織がある。対等に言い合えるような雰囲気が必要。

（西山さん）自分がかかわったことがある団体では年齢や経験年数は関係なく、みんな下の名前で呼び合っていた。そうすると、対等の雰囲気が出て、とても良いと思いました。

（小林さん）市民活動は年齢層がどうしてもかたよってしまうのが問題なんだと思います。

○活動後の懇親会でも年齢層がかたよると、同じ話題、懐かしむ話題などで盛り上がりがちで、他世代や他の属性の人が参加をしても、疎外感を感じてしまうことがある。

○単純な多数決で物事を決定するのではなく、もっとよく話し、熟議する必要がある。対話による合意形成が必要。

次回は8月20日（土）、9月11日（日）の10:00～12:00。今回出たお話のなかから、主に黄色の枠で囲んだ部分を掘り下げていきます。

赤字下線は他の活動や団体にも活かせそうなことです。

上記時間帯に基本的にオンラインで相談残回を実施していきますので、ご感心あればぜひ、ご視聴ください。ご意見、質問などは随時、メールやSNSへのコメント等へお願いいたします。

春日部市市民活動支援センター
（ぽぽら春日部）春日部市南1丁目1−7
popola@kasukabehall.jp

次回のご案内→